

関口雄輝記念美術館 所蔵作品展

# 響き合う光と陰

2011年6月25日(土)～10月23日(日)

休館日／月曜日（祝日の場合は翌火曜日）

開館時間／午前10時～午後4時30分（入館は午後4時まで）

入場料金／大人800円（600円） 大学・専門学生600円（400円）

中高生400円（200円） 小学生200円（100円） 幼児無料

※括弧内はリピーター料金 過去の入場券の半券のご提示でご利用いただけます

関口雄輝記念美術館

関口の代名詞とも言うべき「モノクロームの風景」は、白と黒を基調としながらも、必ず金色や、赤、青、緑といった原色による「差し色」を伴う。一見するとシュールレアリスム的な表現などとの親近を思わせる技法であるが、当の関口は、これについて次のように述べている。「白と黒の強烈なコントラストから出てくる風景が私は好きになりました。作品は単なる風景ではなくてその画面に漂う空気の気も描いている。そのためどういう風に構成するかを考えます。中心になるのは強い白、真っ黒な色それを助ける金、青、赤が必要です。実際の現場にそのような色がなくても気を描くためにそういうものが必要になってくるのです。」<sup>\*</sup> すなわち基調となる白と黒も、差し色として配される原色も、その色彩そのものについての関心によって用いられているのではなく、コントラストによって風景が帯びる特別な気配を可視化するために用いられているのである。

「モノクロームの風景」の原点が、北海道の雪景にあったことは疑うまでもない。しかしその主眼がコントラストに置かれていたとするならば、白と黒を基調とした雪景の作品のみを「モノクロームの風景」と見なすことは、関口が実現を目指した独自の風景表現を、一部の作例が示す限定的な傾向へと矮小化しかねないように思われる。そこで本展では、コントラストに着目し、関口の作品を見直すことを試みたい。様々な作品に描き込まれた光と陰、明と暗の対比を見つめ直したとき、そこにはより雄弁な「モノクローム」の世界が浮かび上がってくるだろう。

\*「自然の光と空気を描く巨匠 関口雄輝」展(1998年) 図録 p37

## 第二展示室

昨年度、新たに収蔵された作品を紹介する。なかでも水彩作品の《緑光》は、画学生の関口が1947年の第3回日本美術展覧会の洋画部に「尾池徳三郎」という仮名で出品し入選した作品で、資料的にも興味深い作例である。



《緑光》 1947年

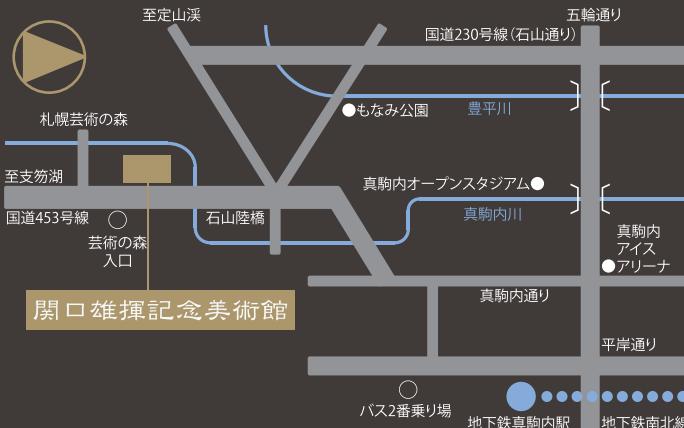
## 第三展示室

女性像のスケッチを紹介する。関口が人物を描いた作例はほとんどないが、フランス留学期のわずかな期間のみ、ドガやマネなど巨匠の作品に触発されて、多くの女性像や裸婦像を描いている。日本画らしい線描による形態の把握が試みられている様子が窺われる。



《婦人像》 1954年

## 周辺地図



## 交通

### ■地下鉄・バスをご利用のお客様

地下鉄南北線「真駒内」駅バス2番乗り場より中央バス乗車  
「芸術の森入口」下車（所要時間14分 約15分間隔で運行）  
真駒内方面に徒歩1分

### ■お車をご利用のお客様

札幌市街中心部より国道453号線を南下  
支笏湖方面に約40分

# 関口雄輝記念美術館

〒005-0853 札幌市南区常盤3条1丁目（芸術の森入口）  
TEL 011-593-5050 URL <http://www.sekiguchi-muse.jp/>